

牛群検定を優良活用した事例が全国農業新聞の本年4月27日分に紹介されました。発行元の全国農業会議所様のご厚意により全文を掲載させていただきます。牛群検定にまだ加入されていない方にも、是非紹介して下さい。

## 牛群検定 大幅な経営改善に

とみか  
岐阜県富加町で乳肉複合経営を行う生駒牧場は、8年前に牛群検定へ加入し、飼養管理の改善と牛群改良を進めてきた。効果は高く、乳量が飛躍的に増加し、繁殖成績も向上。大幅な経営改善を実現した。

岐阜県・富加町 生駒牧場



生駒さん夫婦の搾乳牛舎は天井が高く風通しが抜群

### 一頭ずつ測定・分析 成績見て給餌調整

認定農業者の生駒一成さん(49)が代表を務める生駒牧場は経産牛45頭、育成牛20頭、繁殖和牛6頭、和牛子牛13頭を飼養している。20年前に父から引き継いだ当時と比較すると規模は半分ほどに縮小しているが、規模拡大ではなく、1頭1頭の個体管理に力を入れていく方針が功を奏し、経営状況は格段に良くなったという。

なかでも効果があったのが牛群検定。獣医師のアドバイスで加入した。加入した農家は毎月1回個体ごとに乳量、繁殖成績などを測定・記録し、検定機関に送付。集計・分析された検定成績が後日、農家に送られる仕組みとなっている。検定費用は現在の規模で年約27万円だ。

一成さんは「最初は半信半疑だったが、2年経過したら経営が急に良くなってきた。加入を勧めてくれた獣医師のおかげ」と話す。牛群検定の効果は多様で、トウモロコシを主とする濃厚飼料の量を調節したり、牛群改良に役立っている。

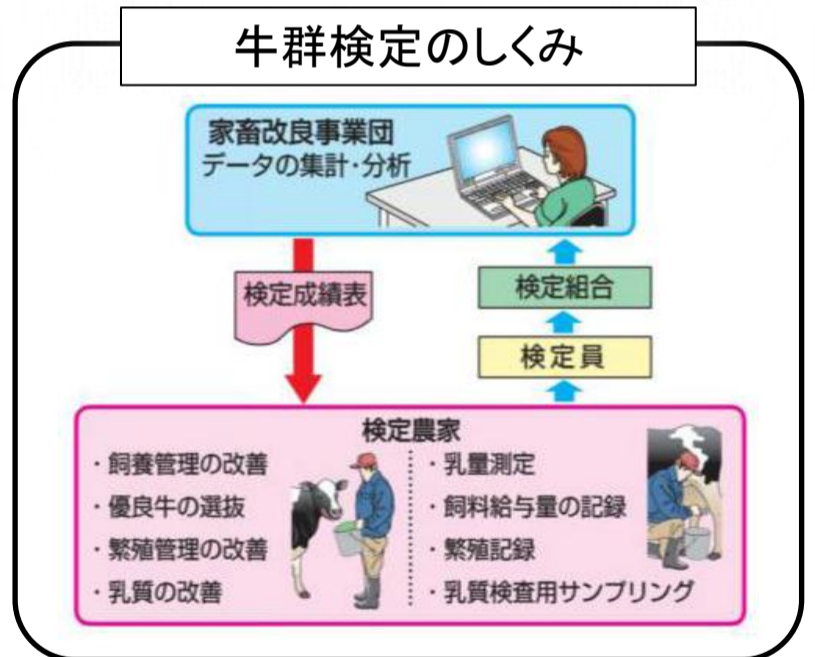
牛の餌やりでは、以前では自動給餌機を使い、全頭同じ量の濃厚飼料を与えていたが、現在は牛群検定の結果に応じて給与量を調整。1頭1頭手作業で与えている。給与量は妻の薫さん(49)が決定。毎月500㌔単位で調整し、父母も含め4人の誰もが分かるように牛舎内の黒板にその量を記入している。給与は朝夕2回ずつの1日4回。手間はかかるが、乳量に応じたきめ細かい管理で確実に効果をあげてきた。

## 産前産後 重点管理で事故低減

最も気を配るのが産前産後の時期。「病気の8割はこの時期」と一成さんは語るように、重点的な管理が必要となる。薫さんは「産まれる1か月前から乳量に応じて濃厚飼料を増やし、ピークに持っていく。こまめに管理することが基本で、出産後は3日に1回の頻度で徐々に増やしていく」と管理のポイントを語る。

毎月の牛群検定時に乳量だけでなく、出産後から乾乳期までの「太り気味」「普通」「やせ気味」といった状態(ボディークンディション)にも気を配り、数値にして記録。濃厚飼料の給与量を調整する際の判断材料としている。「太り過ぎると産前産後に調子が悪くなり、さまざまな所に影響してくる。太らなくなってから受胎率が改善し、産後の事故も減った」と薫さん。カルシウムやビタミンの投与などの取り組みの効果もあり、牛群検定を始めたころ3.8回だった平均種付け回数は8年間で1.7回に減少し、受胎率が向上。事故もほとんどなくなった。

### 牛群検定のしくみ



### 年間平均乳量1万キロ弱に増

牛群検定は遺伝率の把握も可能なため、低能力牛を淘汰する際の目安にもなる。良い種をつけても成績の悪い牛は、種を変えてみたり、淘汰の対象としてきた。牛群改良は着実に進み、「今は初産でも(1日1頭当たり)30キロの乳を出す牛になってきた」と一成さんは語る。

生駒牧場では、飼料の生産も行っており、乳量の30キロは十分に利益が出る水準。平均年間乳量は1万キロ弱となり、牛群検定に加入する前の7千キロから大幅にアップした。